男女共同参画社会をめざして

かがやく

Vol.4

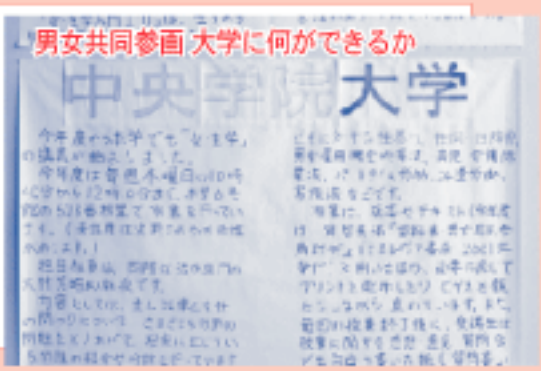
— あなたも、わたしも —

特集 あびこ男女共同参画フェスタ2002

連載 かがやく個性たち

昨年11月30日 男女共同参画フェスタ 第3部「市民団体等による発表・展示」

性教育にチャレンジ！



男女共同参画 大学に何ができるか

ジェンダーいろは歌留多

親子でパンづくり

CAP 子どもへの暴力防止プログラム

生き生き農業 本音でトーク

アヤメと歌声でまちづくり

夫婦で考えよう 定年後の人生

暴力のない世界をめざして

我孫子市

あびこ男女共同参画フェスタ2002

昨２００２年１１月３０日（土）、男女共同参画推進本部、内閣府、我孫子市の共同主催で「あびこ男女共同参画フェスタ２００２」が開催されました。多くの市民が参加し、男女共同参画都市宣言文を読み上げ、我孫子市の男女共同参画の現状と将来に向けての取り組みが紹介されました。

当日は３部形式で行われ、第１部は式典と記念講演（川村学園女子大学教授若桑みどりさん）。第２部は我孫子市が進める男女平等教育を映像と創作劇で再現。第３部は市内の市民団体等による発表・展示という構成でした。このフェスタの実施にあたっては、公募市民による企画・運営委員会と市が共同で企画・運営しました。その概要を紹介します。

男女共同参画都市宣言文を読み上げる市長と市民の皆さん

記念講演「文化の創造　女と男」

【要旨】　川村学園女子大学教授 **若桑みどり**さん

ジェンダー、男女の性差別的文化、社会の構造の解消は、経済、労働、地域社会や家庭において進んでいますが、全体から見ればまだまだ遅れています。国民が心から、男女共同参画が２１世紀の日本にとって最重要課題だと思うには何が障害なのか。その本当の原因は、具体的な施策、法案や条例がいくらあっても、ジェンダー差別、つまり女性差別は人々の意識の奥底に、ほとんど無意識の状態にまで刷り込まれていて、変えることは非常に難しいということなのです。

意識を作り出すのは何か

一つは教育であり、もう一つは文化です。一番人々の心に訴えるものはマスメディアの大量に生み出される映像、活字、コマーシャル、テレビ番組、雑誌、漫画、映画、看板等です。それらは都市の空間を満たし、驚くような空間に日本は置かれている。私は生涯の半分をイタリアでおくっておりますが、イタリアでは決してそのようなことはありません。北京女性会議以降、先進国であるヨーロッパやアメリカでは、法律によって女性を侮辱するメディアが規制されているからです。

「女性会議２０００年、日本ＮＧＯレポート」によれば、日本のメディアは女性を性の対象としている番組やコマーシャルの多さで国際的にも悪名が高い。しかし番組やコマーシャルだけではなく、これからビデオで見ていただきますが、とんでもない都市風景が私たちを取り巻いているのです。

しかし日本でも素晴らしい取り組みをしている例があります。貝塚市では、市民に向けて、テレビコマーシャル、広告、地域のミニコミ誌のような、生活をとりまいているイメージに、固定的な性別役割に基づく女性像がとても多く、それらは女性の尊厳を傷つけ、女性の性を商品化することを明示する、あるいは暗示するものが非常に多いという意識調査をしています。そしてメディアを読み、活用するための教育がとても大切だといっています。

日本のマスメディアにおける女性像

（スライド上映）

それでは電車の中吊り、テレビコマーシャルにおける男女差別の例をスライドでお見せしましょう。

これらのコマーシャルは、全部商品を売るために企業が作っています。つまり資本主義ですから企業の利潤がまずは優先される。企業が売るために作っているイメージが都市空間に、茶の間にあふれているということになります。

人がモノを買うのは「買いたい」という欲望を喚起されるからです。その欲望を喚起するために一番効果的なのは性的欲望なのです。だから何の関係もないミニスカートや水着の女性が出てくるのです。

そして、女性を固定的役割に固定し、性暴力や性的対象へと誘い込み、時には女性を、男性よりも頭の悪い、時々ヒステリックな、相当に偏差値が低い、そういう存在として描くようなものが出回っているわけです。

ありとあらゆるところで、毎日見ている映像や文化が「女はやっぱりだめだ」「やっぱり男に頼まなきゃ」という気持にさせてしまう、そういうことになるわけです。

都市空間における女性像

（スライドとビデオ上映）

東京都の中心、都庁の中央広場に裸体の女性像が８体。これは当たり前のことでしょうか。ふつう女性が裸になるのはお風呂に入るときと寝室に入るときです。つまり芸術の名を借りて公共の場にこういうものが乱立しているのが日本の現状なのです。欧米の美術は裸じゃないかと言いますが、それはすでに過去の遺念です。また、私どもは、だからといって女が裸でいいとは思っていません。

原宿の駅で見つけた携帯電話の広告です。若い女性の顔の上半分が切れています。つまりこの人が誰であるかは問題ではない。個人の尊厳は考えていません。美容の花のような顔をして唇を突き出している。唇が笑っている。それだけです。

このように女性の肉体を切断して部分化することをアメリカは禁じています。顔がないということは「身体や唇という性的なモノであればいい」ということにほかならないからです。

駅やコンビニにあふれている、女性を性的対象として見、人格を無視するような性的イメージがどんなに女性の尊厳を傷つけているか。一度女性の立場にたって考えてみるべきではないでしょうか。公共の空間やメディアがすべて男性の性的な欲望を優先して作られている、こんな国があっていいでしょうか。

女性側の　文化への積極的な参画を

私はけっして表現の自由を侵すつもりはありません。それこそ真にわれわれが獲得した基本的人権ですから。しかし同時に公共の福祉を考えると、公共空間やメディアの制作決定の現場に女性を入れることによって、女性がそれを見たらどう思うかという意見を吸い上げる、あるいは視聴者である市民が能動的に働きかけることも大事なのです。

第2部「あなたらしく わたしらしく」
～我孫子市がすすめる男女平等教育～

男女共同参画社会の実現には、学校・家庭・地域が連携して、子どもの時から、男女平等意識を育（はぐく）んでいくことが大切です。そこで第２部では、市内小・中学校が取り組んでいる男女平等教育の実際を、映像や再現劇を使って紹介し、学校・地域・家庭の役割や求められる姿について考えました。

１「映像で見る学校の変化」

スライドを上映しながら、教育委員会から次のような発表がありました。

１　名簿は男子が先で女子が後、名前㋐呼ぶ時も常に男子が先であったが、50音順や生年月日順等の「男女混合名簿」に改めた。

２　男子を“くん”女子を“さん”で呼㋑んでいたが、男女とも“さん”で呼ぶ。

３　集会などの時、男子、女子と別々㋒に並んでいたが、混合名簿のとおり並ぶ。

４　運動会の徒競走の種目では男女別㋓だったが、タイム別に走るようにした。その結果、女子が男子に勝つこともあった。５　体操服の色や形を男女同じにした。

㋔　指導する時、「女の子だから…して㋕はいけない」「男の子だから…しなさい」と言うことが減った。

他にもたくさんありますが、以上のような取り組みを、子どもたちは自然に受け入れましたが、教師たちには、最初戸惑いがあり、面倒でもありました。しかし、教師の意識が大きく変わっていきました。自分たちの差別意識に気がつき、男・女それぞれの集団として見るのではなく、一人ひとりの子どもの顔を見るようになりました。その結果、一人ひとりが見え、その良さや個性を尊重して伸ばそうとするようになりました。

２「我孫子第三小学校４年生の皆さんによる教室の再現」

昨年１１月、道徳の授業で行われたリボンゲームの再現劇です。子どもの性別に関係なく

（ジャンケンで負け－リボンをつける＝活動的でたくましい男子役）

（ジャンケンで勝ち－リボンをつけない＝すなおで優しい女子役）

を振り当てます。教師は子どもたちに好きな色・教科や将来の職業等を質問しながら、例えば、男は青で赤はダメ、男は算数や体育が好きで女は国語や図工が得意、保育士になるのは女で医師になるのは男などの考えを強く押し付けていきます。すると子どもたちは“男だから…女だから…”と押し付けられることをイヤなことだと感じます。最後に子どもたちの心からのメッセージが発せられました。

「誰もがかけがえのない自分を持っている。とらわれず、決め付けられず、より自由で、大切な自分になるために、お互いの違いを認め合い、男だから女だからではなく、一人の人間として、より自分らしく生きていきたい！」

３「男女平等意識を育む学校・地域・家庭の役割」

川村学園女子大学助教授　内海崎貴子さん

我孫子市男女平等教育の学校での取り組みが、家庭や地域といかに連携していったらいいのか？　その子らしさを生かすために大人はどう関わったらいいのか？　大人は無意識のうちに子どもの性別によって働きかけ方を変え、「男だから…女だから…」という自分の持っている意識を押し付けます。「男だから」「女だから」という意識が、中高年の男性に自殺が多いこと、男の子に引きこもりが多いこと、女の子が過度のダイエットをすることなどの一因とも言われています。

子どもたちの持っている資質や個性を伸ばすために、もう一度、家庭や地域の“男はこうあるべき、女はこうあるべき”という見方や思い込みを、ちょっと疑ってみませんか。注意してみませんか。これだけでも子どもへの対応が大きく変わっていきます。「自分らしさ」を大切にすることの重要さについて親子で話し合ってみましょう。

我孫子第三小学校４年生の皆さん

〈アンケート〉より

・記念講演は具体的で迫力がありました。いままで意識しなかった公共空間の中で女性が置かれている身分の低さが感じられ、共感できました。（４０代女性）

・国の取り組みの一部分しか紹介されなかったのが残念。男性側から見たジェンダーについても今後取り上げてほしい。（２０代男性）

連載 かがやく個性たち ③

古田浩子さん（布佐郵便局長）

◆何年お勤めですか、局長には？

短大を出てからですから、37年間でしょうか。局長になって5年です。

◆仕事のやりがいとは、何ですか？

何しろ現場でしょ。お客さんに「ありがとう！」って、言ってもらったとき、保険が満期になって喜んでもらえたときなど、私までも嬉しくなります。

それと、職場で目標が達成できたときは、本当に「やった！」と感じます。

◆仕事と家庭、特に印象深いこととは？

仕事と子育て…、あのころの保育園は、午後4時までだったでしょ。仕事を続けられたのは、家族の、特に父母のおかげでしたね。それと、健康に恵まれたことです。地域の皆さんにも、同僚や部下にも良くしてもらいました。

局長辞令を郵政局長から直々で受けたときは、とても感激でした。今までで一番印象に残る出来事でした。

◆後輩、特に女性たちへのエールを

結婚、出産で、どうしても嫌がられることがあると思うの。でも、それを乗り越えてチャンスを生かしてほしいですね。女性にも、大いに挑戦してほしいと思います。

男女共同参画時代における《子育て支援者 養成講座》開催

子育て中の方や、保育ボランティアなどで子育てに関わっている方たちを対象に、昨年12月、4日間にわたって、アビスタで「子育て支援者養成講座」が開催されました。

この講座は、女性と学習・次世代育成に貢献している（財）日本女性学習財団が主催。横浜市と我孫子市の2か所で行われたもので、当市は協力機関として関わりました。「男女共同参画時代の子育て支援の基本的な考え方」「子どもと支援者～場面で考えるジェンダー～」（右カコミ）「地域で生かそう、この学び」（下カコミ）などのテーマが設定され、30人余りの受講生は、地域の多くの人たちが子育てに関わることの大切さや、子どもたち一人ひとりの個性を生かした子育ての大切さを学びました。

学習支援者は、内海崎貴子さん（川村学園女子大学助教授）、大森昭生さん（前橋国際大学専任講師）でした。

こんな時、子どもはどんな気持ちだったのかな？

ロールプレイ（役割劇）で、子育てを振り返ると…。

親：男の子でしょう！そんなことでめそめそしない。

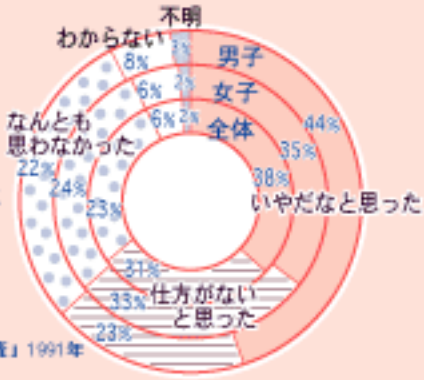
子：男の子だって痛いんだ！

親：男の子なのに、きちんと食べないと大きくなれないよ！

男の子なんだから泣いちゃダメ

ら・し・さはさらに作られる

「女らしく・男らしく」と言われたときの感じ方



神奈川県県民部
『男女平等に関する小学生の意識調査』1991年

講座で学んだこと　どう生かす？

埼玉県越谷市の『NPO子育てサポーター"チャオ"』は、先輩ママたちによる子育て支援団体。"チャオ"では親子講座やお母さんを元気にする講座を開催して、育児不安や育児ストレス解消のお手伝いをしています。

（編集後記）

・本誌は昨年11月30日に開催された「あびこ男女共同参画フェスタ2002」の特集号です。「フェスタ2002」は、当日会場で寄せられたアンケートに見られるように好評でした。（貴）

・当日参加者は延べ500人以上、すべてをお伝えするのは無理ですが、雰囲気だけでも感じていただけたでしょうか。（真）・2002年我孫子市10大ニュースに選ばれなかったのは 何でだろ～。（和）

かがやく－あなたも、わたしも－　Vol.4
■ 発　行：我孫子市
■ 発行日：平成15年3月20日
■ 編　集：『かがやく』編集委員会　TEL. 04-7185-1111
〒270-1192 我孫子市我孫子1858番地 我孫子市環境生活部 男女共同参画担当

この情報紙は再生紙（古紙配合率100%）を使用しています。